

臨時教育審議会と新聞報道（その2）

— 第二次答申と「審議経過の概要（その4）」について —

千葉大学 天 笠 茂

1. はじめに

本稿は、新聞各紙の臨時教育審議会に関する報道記事を整理することを主要な課題としている。今回は、前号（『学校経営研究』11巻，1986年，所収の「臨時教育審議会と新聞報道《その1》」）に引き続き、第二次答申と「審議経過の概要（その4）」が公表された翌日の新聞各紙を取りあげる。対象とする新聞は、＜朝日＞、＜サンケイ＞、＜日本経済（以下、日経）＞、＜毎日＞、＜読売＞の五紙で、いずれも東京版である。また、報道記事の整理の手順については、前号の（その1）の場合と同様である。

2. 第二次答申について

第二次答申は、1986（昭和61）年4月23日に公表された。翌24日の各紙朝刊は、紙面の相当のスペースをこれに関する報道にあてている。各紙は第二次答申をいかに報じたか、第一面から順に整理することにする。

① 第一面の見出し

朝 日	“生涯学習へ体系再編を” ・諸規制の弾力化をうたう	日 経	“生涯学習へ移行を” ・初任者研修打ち出す
サ ン ケ イ	“生涯学習体系をめざす” ・学校・家庭・社会が一体で ・新任教師に研修制 ・弁護士など資格試験 大卒でなくとも挑戦	毎 日	“生涯学習へ体系再編” ・社会人の教員，学生を拡大
		読 売	“生涯学習へ体系再編を” ・家庭・地域を柱に ・新任研修，大学自由化も

各紙とも共通して「生涯学習」をトップの見出しに掲げている。この他、＜サンケイ＞、＜日経＞、

＜読売＞の各紙には新任教師とか初任者研修などの言葉も見られる。第二次答申のポイントは生涯学習体系と初任者研修にあり、とするのが新聞各紙のほぼ共通した見方である。

ところで、「概要（その３）」の報道に際してトップの見出しに一字も見られなかった「生涯学習」が、第二次答申の報道では中心的なキー・ワードとして位置づけられている。「概要（その３）」公表後から第二次答申までの審議の間に「生涯学習」が急速に浮上した動きを受けての結果であることは言うまでもないが、このことの是非や生涯学習の構想自体について評価を加えた見出を掲げる新聞はない。第二次答申に対して、積極的に肯定もしなければ否定もしない。こんな新聞各紙の態度を見立しは語っている、と言えないであろうか。

② 連載の特集

朝 日	<p>「臨教審第二次答申の断面」</p> <p>(上) 首相、称賛の裏で落胆 意向が反映されず 「大改革」にはほど遠く 人気の獲得を意識して P R 政治主導の手法通じず 地道な改革に軌道修正</p> <p>(下) 尾を引く自由化をめぐる対立 教育目標 自主は自由に 連帯より公共 教育委員の公選制 深入りは危険と判断 教育基本法 改革出発点に定着</p>
サ ン ケ イ	<p>「波高し教育改革 臨教審答申の舞台裏」</p> <p>(上) 首相の不満「国民向け具体案がない」 長期的視点に立つ臨教審とギャップ</p> <p>(中) 水面下の闘い 火花散る文部対大蔵 関係団体も３次へ奔走</p> <p>(下) 残された課題 難関は文部省“改革” 最大の圧力団体 …… 自民</p>
日 経	<p>「臨教審トップに聞く」</p> <p>(上) 岡本道雄 答申、実現信じる 仕事半分以上終わった</p> <p>(中) 中山素平 青田買い防止に力 改革実現へ民活導入も</p> <p>(下)</p>

日 経	な し
毎 日	<ul style="list-style-type: none"> ・解説記事「後進性示す？ 4 % 学部大学生に対する院生『欧米に比べ低すぎる』」 ・解説記事「留学生を10万人に 21世紀までにフランス並み 急がれる宿舍の確保」 ・解説記事「見て見ぬふり29% 中学生, いじめへの対応 米国では『まず, 止める』」 ・解説記事「延べ750時間15分, 1.3日に1回審議しました, 投書, 意見書は3200通」 ・図「内閣支持率の推移と臨教審の動き」 ・西尾幹二論文「『答申を読んで』メニュー並んだが」 ・臨教審の顔ぶれ ・図「審議経過の概要（その3）から変わった点」
読 売	<ul style="list-style-type: none"> ・解説記事「第二次答申メモ」 ・解説記事 飯島宗一「ここを読んでほしい 大学自らの改革へ道開く」 ・解説記事 有田一寿「ここを読んでほしい 初任者研修『一年』守った」 ・図「犯罪・精神疾患などで処分された教員数の推移」 ・解説記事 石井威望「ここを読んでほしい 家庭でやるべき責任提案」 ・解説記事 天谷直弘「ここを読んでほしい 教育目標の受け入れ願い」 ・戦後教育改革の歩み ・臨教審委員, 専門委員名簿 ・図「荒廃の原因 対策」

例によつての紙面構成であるが、論説文の掲載を見ると、今回は、＜毎日＞に西尾幹二氏の「『答申を読んで』メニュー並んだが」がある。氏は、答申に対して、「日本の教育の最大の困難に対しては少しも具体的ではなく、相変わらず逃げの姿勢で、きれいごとの空想を語っているばかりである。」と述べている。

一方、＜毎日＞の「内閣支持率の推移と臨教審の動き」や、＜読売＞の「犯罪・精神疾患などで処分された教員数の推移」、など興味深いデータが掲載されている。読者の関心を引きつけ、理解を深める働きかけとして、工夫の跡がうかがわれる。しかし、膨大な答申文の扱い方、構成の仕方については、読みやすさという点から、なお工夫の余地が残されていたように思われる。

④ 社会面の見出し

朝 日	<p>“先生の卵 不安でいっぱい”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初任者研修制 先生の先生“悲願”というけれど ・「個性とても育たぬ 1年間は長すぎる」 <p>“大学に新風吹くか”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・答申の青写真 <p>入りやすく、出にくいところに 大学院充実で24歳博士を 昼夜開講でパート受講も</p>
サ ン ケ イ	<p>“理想の先生は？ 二十四の瞳大石先生のような人”</p> <p>サンデーモニター50人に聞きました</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情熱と優しさを求める ・向上心も要素に 意外、金八先生は人気薄
日 経	<p>“個性豊かな教育へ青写真”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・24歳博士お目見え ・大学改革，秋の入学OK
毎 日	<p>“言葉のキラ星，さて？”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いじめの根に触れていない ・新米先生に先生「人選が」 <p>“臨教審の750時間 激論・珍問答アラカルト”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・80点の合格スレスレ ・大蔵省に遠慮している ・教育問題は利権だな ・大しらけだ
読 売	<p>“「家庭の教育力」…とまどうナ”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食か弁当か激論 ・いじめ根絶に一声 <p>“「初任者研修制」教育長に聞く”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・賛成多いが注文も ・指導教師は？財政措置は？

社会面では、＜日経＞をのぞいて新任教師や初任者研修に関する見出しが見られる。「先生の卵 不安でいっぱい」＜朝日＞、「理想の先生は？」＜サンケイ＞、「新米先生に先生」＜毎日＞、など表現に工夫をこらしたり、また、＜読売＞のように、各県教育長に初任者研修に関するアンケート調査の結果を示す、など、初任者研修の内容と問題点をわかりやすく伝え、読者に考えを促す姿

勢が認められる。ただ、「先生の先生」とか「先生を教える先生」などの表現は、すでに「概要（その３）」でも使用されており、いささか新鮮味に欠けている。また、教育長に対するアンケート調査についても他紙が実施しており、また再び、という感じがしないでもない。

この他、＜朝日＞と＜日経＞は大学改革について、＜読売＞は「家庭の教育力」について取り上げている。また、答申文の膨大な文量を「言葉のキラ星、さて？」と、いささか皮肉った見出しで突いた＜毎日＞の見出しが、他紙にはない表現として印象に残った。

⑤ 社説

第二次答申に関する社説を整理したのが下の表である。作表の要領は、第一次答申及び「概要（その３）」と同様で、ポイントと思われる文章を抜き出し、肯定的に評価した点と批判点・要望点にわけて整理した。この表をもとに各紙社説に見られる特徴的な傾向をあげるならば、次の点が指摘できる。

まず第一に、生涯学習の構想については各紙とも共通して肯定している。「生涯教育重視は正しい」＜朝日＞、「評価できる点、教育改革の基本構図に生涯学習を据えていること」＜サンケイ＞、「この基本方向（生涯学習体系への移行）を導き出した…未来への展望は、…まずは妥当だと思う」＜読売＞、などの文章がそれであり、いささかの疑念を指摘する＜日経＞も最後には、「このような基調もあり得るのだろう」と生涯学習の構想を認めている。このように、生涯学習の構想自体について、疑問を提示して正面から批判の論陣を張り、論を展開する社説は、この五紙には見られない。

第二に、これまで通り、一部を肯定して一部を批判するトーンが貫かれている。たとえば、「総論では新鮮な学校観で快い驚きをもたらした答申だが、各論では失望させる部分が多い」＜毎日＞の文章など、その一例としてあげられる。

肯定面は生涯学習の構想である。また、＜朝日＞は、「不幸な対立に思い切った終止符を打たなければならない」とか、「あらためて憲法、教育基本法の尊重を強調したい」など、答申のいくつかの箇所を抜き出して評価を与えている。

批判点は答申全体を通しての焦点のとらえにくさ、答申の散漫さ、総論と各論のズレ、などに集中する。「生涯学習の構想は、総論としては立派だが、各論まで十分に浸透していないのではないのか…」＜サンケイ＞、「焦点は依然とらえにくい。…『現代の教育改革とは何か』は相変わらず不鮮明である」＜日経＞、「どうしても物足りなさが残ると言わざるを得ない」＜読売＞、などの文章に代表されている。

第三に、内容の具体化がほぼ共通の要求として出されている。「改革理念の一層の具体化を」＜朝日＞、「もう一步踏み込んだ具体的提言がほしい」＜サンケイ＞、「次の答申では、もっと論点を精選し、わかりやすい文章で書く努力が必要だろう」＜毎日＞、などに各紙の要望点が見られる。

以上、各紙の社説を見ると、細かな点では主張に違いがあるものの、各紙に共通する点もまた多

い。生涯学習の構想は理解できるが、その具体像や各論は不鮮明であり、さらに論点を詰め、具体的な提言を行う必要がある、ということである。そしてまた、この点の主張も第一次答申、「概要（その3）」の場合も大きく異なるものではない。

	＜朝日＞ “改革理念の一層の具体化を”	＜サンケイ＞ “踏み込み欠いた提言”	＜日経＞ “臨教審は生涯学習社会というが”	＜毎日＞ “どう実現する学習社会”	＜読売＞ “物足りない臨教審の第二次答申”
評価点	<p>「生涯教育重視は正しい」</p> <p>「改革の理念と、具体的な方策との間に一貫性が欠けた、これまでの審議の欠陥を克服する上でも、この観点（生涯学習の体系の中で学校教育のあり方を見直す）を前面に出したのはよい」</p> <p>「答申は、戦後40年を経て、21世紀を15年後に展望するに至った今日、歴史は歴史として、この不幸な対立に思い切った終止符を打たなければならぬ」といっている。同感である。」</p> <p>「答申が、あらためて憲法、教育基本法の尊重を強調したい」といい切ったのは一評価したい。」</p>	<p>「評価できる点 。教育改革の基本構図に生涯学習を据えていること。 。子どもの心の健全な育成のための方策を提案したことも評価したい。 。学校教育面で、個性重視、多様化、自由化をめざす提言がある程度盛り込まれていること。」</p>	<p>「『豊かな生活の中で満悦感に浸っている』（1月の審議経過概要）中で『21世紀に向けての基本的あり方』を示そうというのだから、このような基調もあり得るのたろう。」</p>	<p>「総論では新鮮な学校感で、快い驚きをもたらした答申だが…」</p>	<p>「この基本方向（『生涯学習体系への移行』）を導き出した教育の歴史的考察や現状分析、未来への展望は、…まずは妥当と思う。」</p>
批判点・要望点	<p>「初中教育の改革案に、それ（生涯教育の重視）がどう反映しているかとなると、なおあいまいな印象がぬぐい切れない。」</p> <p>「答申は、大学教育の質にもっと関心を示し、量については『いたずらな量的拡大を憂える声は小さくない』と述べて、みずからの判断は避けている。」</p> <p>「かえりみて他をいう響きの残る答申の姿勢は、対立の克服を真に導き出すところまで達していない。」</p>	<p>「生涯学習の構想は、総論としては立派だが、各論まで十分に浸透していないのではないかという不満が残る。」</p> <p>「もう一步踏み込んだ具体的提言がほしい」</p>	<p>「焦点は依然とらえにくい。これでは関係者や一般国民がそれぞれ『つまみ読み』することになり、『現代の教育改革とは何か』は相変わらず不鮮明である。」</p>	<p>「各論では失望さる部分が多い。」</p> <p>「第一に、総論とくはくはな提案。 第二に、財政の裏付けが欠けているため、実現性が不明な点。 第三に、21世紀を見通した中長期的な改革と、当面の諸問題が混在している。」</p> <p>「改革の細部をきちんと詰めてほしい」</p> <p>「次の答申では、もっと論点を精選し、わかりやすい文章で書く努力が必要だろう。」</p>	<p>「どうしても物足りないか残ると言わざるを得ない」</p> <p>「具体的な個々の改革の手たてが、方向づけの構想に比べ、弱いという印象が否めない。…また、その手たてが、なぜ改革の方向につながるのか明確でないものもある。」</p> <p>「いささか羅列的で、散漫な感がある。」</p> <p>「臨教審は、いい意味でのPRを怠ってはならない。」</p>

3. 「審議経過の概要（その4）」について

「審議経過の概要（その4）」は、1987（昭和62）年1月23日に公表された。以下、翌1月24日朝刊各紙を、これまでと同様の手順で整理を続けることにする。

① 第一面の見出し

朝 日	“教育の国際化を求める” ・帰国子女に新国際学校 ・英語教育は会話力重視 ・9月入学は両論を併記	日 経	“教育に民活導入を” ・秋季入学には両論
	サ ン ケ イ	毎 日	“教育に民活導入を” ・生涯学習にモデル都市 ・9月入学制，教科書検定 結論を持ち越し
		読 売	“教育向上に民活導入” ・公的資格 学歴要件なくす

＜日経＞，＜毎日＞，＜読売＞の三紙が「教育に民活導入」をあげ，＜朝日＞は「教育の国際化」，＜サンケイ＞は「生涯学習都市づくり」をそれぞれ掲げている。第二次答申の際，いずれも「生涯学習」をあげたのに対して，各紙によってアクセントの置き方に違いが見られる。ただ，サブの見出しを見ると，＜読売＞をのぞいて，いずれも9月入学制を取りあげている。生涯学習に続いて新聞各紙が共通して注目するのは，9月入学の問題ということになるのであろうか。なお，＜サンケイ＞は，「概要（その3）」以来の扱い方を変えて，「現在の荒廃に対策なし」と，「概要（その4）」に対して評価を加えた見出しを掲げている。

一方，各紙とも，臨教審関係の記事を一面のトップではなく左欄か中央に位置づけて紙面構成をはかっている。答申ではなく「審議経過の概要」との判断による扱い方の相違とも考えられるが，第二次答申の際に比較して臨教審関係にあてるスペースが少なくなっている。各紙の臨教審に対する関心・対応の変化なのか，新聞の臨教審ばなれの現象なのか，変化に注目したい。

② 連載の特集

朝 日	な し
サ ン ケ イ	な し
日 経	な し
毎 日	「臨教審概要を読む」 ① 学歴はいらない？ 生涯学習への道のり ② 競争原理の功罪は？ 疑問多い“かせぐ大学” ③
読 売	な し

表にあるように、「概要（その４）」に関して連載を組んだのは＜毎日＞「臨教審概要を読む」の一紙のみである。「概要（その３）」に際しては、＜サンケイ＞、＜日経＞、＜毎日＞の三紙が連載を組んでいた。国民の臨教審に対する微妙な変化を読み取ってのことなのか、それとも新聞自身が関心を失ってきたのか。臨教審に対する各紙の対応の変化が、このあたりに具体的な形となって出ているのではなかろうか。

③ 答申文の抜粋と関連資料

＜朝日＞、＜毎日＞、＜読売＞は、例によって、「概要（その４）」の原文の一部を抜粋して掲載し、あわせて各種の資料等をのせている。ここでも、原文の扱い方については紙数の関係で省略する。以下の表は、先の場合と同様、掲載された資料等をまとめたものである。

朝日	<ul style="list-style-type: none"> ・天野郁夫論文「改革の方向は混迷の中 教育費の貧困こそ問題」 ・臨教審の顔ぶれ ・図「教科書制度の仕組み」 ・図「高等教育の国際比較（1982年度）」 ・図「世界の入学時期」
サンケイ	なし
日経	なし
毎日	<ul style="list-style-type: none"> ・図「現行教科書制度 第1部会の改革意見（認定制）」 ・図「臨教審がこれまでに打ち出した主な改革提言」 ・図「地域別に見た各国の入学時期」 ・臨教審の顔ぶれ ・解説記事「インテリジェントスクール 生涯学習の中核に」 ・解説記事「米が手本、具体化は白紙 大学教員の任期制」 ・解説記事「ラ元大使寄稿で急浮上 『新国際学校』構想」 ・解説記事「『学区制の自由化』認めつつも 結論は現状のまま」
読売	<ul style="list-style-type: none"> ・用語の解説「『インテリジェント・スクール』情報通信機能備え地域社会にも開放」 ・用語の解説「『教科書検定』選択の機会拡大か教育内容の統一か」 ・用語の解説「『通学区域』どの学校に行くのか親の一番の関心事」 ・用語の解説「『9月入学』半数近い国で実施『国際化』軸に論議」 ・概要メモ

今回は、＜朝日＞に天野郁夫氏の「『概要』を読んで 改革の方向は混乱の中 教育費の貧困こそ問題」がある。氏は、「概要（その４）」を「読む側にとっては、これは不親切な、審議の『混乱』を感じさせる報告書である」と批判する。そして、国民的な関心のたかまりが失われつつあるのも、答申や経過報告が市民や教育関係者に「読みやすい、理解されやすい形で書かれているとはいえないからである」と指摘し、改革の構想が明確に読み取れる文章と構成を望むと述べている。

なお、三紙とも関係の資料として、教科書制度や国際比較をあげている。また、＜毎日＞、＜読売＞には、「インテリジェント・スクール」についての解説記事も見られる。

④ 社会面の見出し

朝 日	“教科書検定をこう考える” ・発行・採択は自由が理想 ・教育水準均衡の前提 ・国民の批判力に期待 ・非権力的機関ならよい ・社会科は自由化を	日 経	“教科書検定対立鮮明に” ・自由化論者と文部省、根深い確執 ・大幅な改革迫る 第一部会 ・現状維持を貫く 第三部会
	サ ン ケ イ	読 売	“９月入学 通学区域 ヤキモキ「玉虫審議」” ・改革メリットどこに
		毎 日	な し

社会面では、＜朝日＞と＜日経＞が教科書検定の問題を、＜サンケイ＞と＜読売＞が９月入学の問題を、それぞれ見出しのトップに掲げている。ともに臨教審内部において対立している課題であるが、＜日経＞は臨教審内部の様子を、＜朝日＞はいわゆる識者のコメントを紹介し、それぞれ紙面を構成している。また、＜サンケイ＞は入学時期を４月か９月か読者に問題を提起する紙面となっている。＜読売＞は、結論が出ない審議を“ヤキモキ「玉虫審議」”と称し、９月入学や通学区域の選択についてメリット・デメリットを教育関係者などに意見を求め紙面をまとめている。なお、＜毎日＞は、「概要（その４）」について社会面では扱っていない。このあたりも第一次答申以来見られなかった動きである。

⑤ 社説

先の場合と同様に、「概要（その４）」に対する社説を整理したのが下の表である。各紙社説の特徴的な傾向として次の点があげられる。

第一に、いつまでも問題が整理できず、改革の構想を具体的に提示できない臨教審に対して各紙にいら立ちが見られる。「テーマは多いが雑然としている。新しい教育像が、具体的にイメージで

きない」＜毎日＞、「すべてが書いてあって、逆に何も書いていない感が免れない案とっていい」＜日経＞、などの社説を通して臨教審に対する新聞各紙のいら立ちが感じ取られる。それが、「二派に分かれての水かけ論を任期切れまで続けていいんだろうか」＜朝日＞という批判となったり、＜日経＞のように議論すべきテーマを臨教審に投げかける動きの支えになっていると言えよう。今回も「一部肯定・一部批判」が各紙社説を貫くトーンになっている。しかし、＜日経＞に見られるように、従来になく臨教審に対する批判・不満のトーンを強めたと指摘することができよう。

第二に、社説の要望も、現実の問題解決と長期的展望に立った教育改革案の提示とに、分かれる傾向が見られる。＜サンケイ＞は「受験戦争を忘れるな」と前者に重きを置く要望を、また、＜朝日＞は「未来に向けての教育改革案を」と後者に重きを置く要望を、それぞれ投げかけている。臨教審発足以来、ことあるごとに揺れ動いている点であるが、改めてこのような形となって示されて

	＜朝日＞ “未来に向けての教育改革案を”	＜サンケイ＞ “受験戦争解決を忘れるな”	＜日経＞ “依然として問題を整理できぬ臨教審”	＜毎日＞ “個性重視の教育をというが”	＜読売＞ “臨教審をしりすほみにするな”
評価点	「部会とは別に設けられた委員会の論議の中に、新鮮な考え方がいくつも示されているように感じられる。」	「目配りよく広い範囲にわたって問題がとり上げられている…」		「注目すべき論点がいくつかある。」 「改革の原則として、概要は、個性重視と生涯学習体系への移行を掲げている。…原則として妥当なものといっていよう。」	「大いに評価できるものとしては、第一に『公的資格や受験資格から、原則として学歴要件を除く』としたことが挙げられる。」
批判点	「二派に分かれての水かけ論を任期切れまで続けていいんだろうか！」	「大きな欠落があるように思う。それは受験競争の過熱を解消するための十分な対策がうち出されていないということである。」 「多面的な評価はどうすればできるのか、具体的方法には触れていない。」 「多様化、個性化といっても、具体的にどのような選抜基準が考えられるのかという点には、十分な答えがない。」	「全体としてみれば、『概要』は一・二次答申同様に目玉のない案であり、すべてが書いてあって、逆に何も書いていない感が免れない案とっていい。」 「改革の理念、目的が明確でない…」 「あれもこれも、短い時間で問題を広く扱い過ぎる…」 「現行の四月入学を…九月入学に変えてみて、果たしてどれだけメリットがあるのか。」	「テーマが多いが当然としている。新しい教育像が、具体的にイメージできない。」 「もう少し、議論を整理しないと、概要と答申のつながりがあいまいになりはしないだろうか。」 「なぜ、理念が現実のものにならないのか。臨教審の審議では、その点の分析が不十分なのである。」	「今度の答申の目玉になりそうな三つの重要課題が、いずれも賛否両論の併記のかたちで、議論の落ち着き先が見えにくい。」 「インテリジェント・スクール構想も…答申には、もう少しこねた表現、説明が必要だと思う。」
要望点	「21世紀に向かっての教育改革案づくりという、本来の役割を思い出すべきである。」 「あくまで過去にとらわれない。前向きの意欲を感じさせる提案にして見せてほしい。」	「学力だけでなく多面的な人間の能力を評価する方法を開発する体制を早急につくるべきではないか。臨教審は第三次答申でそのことを提言してもらいたい。」	「残る期間を利用して、既に国民的合意があると思われる問題、すなわち平和と豊かさの中で人間形成の在り方、技術立国を目指す上で教育の役割をどう見直すか、国際化時代に応じる学校教育の在り方、教育の質向上に何か必要かなどに議論を絞って結論を出すことが有効だろう。」	「学校教育の現状に対する国民の不満は強い。臨教審への期待も、失望も、そこから出ている。その現実を立て、改革へのプランを考える姿勢を臨教審に求めたい。」	「任期も残り少なくなった臨教審には、しりすほみにならないよう、もう一度、改革への熱気を盛り上げるような審議を期待したい。」

いる。臨教審に何を求めるか。この点についても合意形成を積極的にはかっていく必要はないであろうか。

第三に、国民の臨教審に対する関心の高まり、熱気がさめてきたとの認識にもとづいて、その対応を求める主張が見られる。「臨教審には、しりすぼみにならないよう、もう一度、改革への熱気を盛り上げるような審議を期待したい」＜読売＞など代表的な例である。しかし、そのための具体策については何も述べていない。また、＜日経＞をのぞいて、他紙も臨教審に対する要望は具体性に欠けている。臨教審に何を望むか、国民の関心をどう引きつけるか、新聞自身の姿勢もまた問われていると言わざるを得ない。

4. 作業を通してのコメント

以上、第二次答申及び「概要（その４）」に対する新聞報道を整理し、適宜コメントを加えてきた。最後に、新聞の臨教審報道について３点ほど指摘しておきたい。

① 問われた要約力。膨大な字数からなる答申や経過報告であるため、ポイントの把握や原文の抜粋などの要約力が各紙に問われることになったと言えよう。しかし、＜日経＞の社説の言葉を借りるならば、新聞自身に答申や経過報告を「つまみ読み」するところがなかったか。「現代の教育改革とは何か」を国民にわかりやすく報道する工夫が不足していなかったか、不満の残るところである。もちろん、これは膨大な答申や経過報告、審議のあり方に根本的な原因があることは言うまでもないが、それに各紙も振りまわされた印象を受ける。

② 新聞の臨教審ばなれ。臨教審発足以来、その動向について、新聞各紙は相当のスペースをさいて報道を続けてきた。しかし、臨教審の審議のヤマはすでに第二次答申で越したとの判断があるのであろうか。「概要（その４）」に関する第一面の扱い、連載を組む紙数の減少、などを見ると、扱い方が軽くなったとの印象を受ける。臨教審報道に息切れはないか。報道の姿勢、紙面の構成などにマンネリズムはないか。自己診断が各紙に必要ではなかろうか。

③ リーダーシップへの期待。「概要（その４）」の社説のところでも指摘したように、一向に具体的な教育改革像を提示することのできない臨教審の議論のあり方に対して、各紙は一種のもどかしさ、いら立ちをあらわに示し始めたようである。水かけ論議批判や、教育改革への熱気の盛り上げ、等々の指摘は従来には見られなかったものである。しかし、各紙に混迷する臨教審の議論に影響を及ぼすほどの具体的な提言があるかと見れば、必ずしも十分とは言えない。臨教審に対して、ポイントをおさえた具体的な提言と、教育改革を支える世論形成への建設的なリーダーシップが、改めて、新聞各紙に期待される。